
東方魔戦記

猫剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方魔戦記

【Nコード】

N6702I

【作者名】

猫剣士

【あらすじ】

宝船騒動により、魔界の存在が明らかになった幻想郷。聖が命蓮寺を建ててしばらく、『直立歩行をする青い鳥』を見たと言う噂が流れ始めた。

第0話：幸せの青い鳥？（前書き）

放置気味になって申し訳ありませんでした。

あんまりプロットは出来上がってませんが、大体の流れはできてます。

目標は勿論、完結まで。

では、どうぞ。

第0話：幸せの青い鳥？

冬が去り、春が来てから起きた『空飛ぶ宝船異変』が解決してしばらくした幻想郷。

よく晴れた空の下、山に3人の妖精がいた。

「どうお2人共？」

「けっこっ集まったけど、スターの方は？」

「そこそこっで感じかしらね」

サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアが山菜取りの成果を確認するため集まる。

本来ならもつと早くに出掛けていたが、空飛ぶ宝船異変でサニーミルクが、

『リリイ・ホワイトが遂に幻想郷征服に乗り出したのよ！？

世紀末の襲来よヒャッハー！！』

と、錯乱しながら布団を被ってガタブル震えていたからだ。

彼女だけ残して出かける案が出たが、余りにも哀れな姿だったので却下された。

「んゝ、もうちょつと欲しい所よねゝ。

ちよつと2人とも？

何でそんな優しい顔をしてるのよ？」

いつもの調子に戻っているサニーミルクを見る2人は、まるで愛しい子を見守る母親のような顔をしていた。

「何でもないわ。
ねえ、スター？」

「ええ、ルナ。

…あ、ちよつと待つて。

誰かが近くまで来たみたい」

スターの『動くものの気配を探る程度の能力』に、何者かが引つかかった。

数は4つ。

移動速度は速くない。

「人間：にしては反応が小さいような？」

「とにかく行こう！

そしてイタズラよ！！」

サニーの『光を屈折させる程度の能力』で姿を消し、ルナの『周囲の音を消す程度の能力』で物音を消しながら標的へと近づいていく。

そして相手の姿が見える位置まで接近してその正体を見た時、3人は同じ言葉を漏らした。

「「「何、あれ？」」」

それは見た事もない姿をしていた。

青い体に黄色い嘴。

足は棒の様に細く、腹の部分は白い。

鳥に見えるが、蝙蝠の羽が申し訳程度に背中に付いて、香霖堂の店主と同じく小さな鞆をお腹に付けている。

その絵を描けと言われれば簡単に描けそうな造形をしていたが、よく分からない生物だった。

「いや、調査して来いって言われた時は死を覚悟したツスけど、

魔界より安全な所でよかったツスねえ」

「本当ツス。

ぶっちゃけこのまま帰りたくないツスけど、エトナ様にお仕置きされると思うと、帰らざるをえないツスよね」

「俺、最近エトナ様のお仕置きが快感になってきてるんツスけど、これは病気ツスカね？」

「病気じゃなく、それは新たな覚醒ツス。

今日はお祝いツスね」

頷いて手（？）を重ねあう3匹。

が、1匹だけついて行けてなかった。

「あれ？

もしかしてマトモなのって俺だけツスカ？」

そんな光景を見ていた3人は呆然としていたが、ハッと我にかえた。

「し、喋ったわよ！？」

あの鳥っぽい奴！」

「どうするのサニー？」

「ええ！？

ど、どうするって…

豆でも撒いてみる？」

ただでさえ奇抜な生物が、よりによって言葉を喋った事実には3人は困惑していた。

幻想郷でも、言葉を使える妖怪や幽霊は意外と珍しい。

そうこうしてる内に、青い鳥の近くの地面が円形状に輝きだした。

「お！

ゲートが開いたッス。

こういう事を安心して頼めるのは、やっぱりフロンさんだけッスね

」

「俺達が祈る事は、特撮系DVDに熱中し過ぎて忘れられない事ッス」

「今は何だったッスカねえ？」

お前のツモを数える？」「主人公は雀士じゃなくて、探偵が職業だった筈ッスけど？」

訳の分からない単語をぺらぺらと喋り、輝く輪へと全員が飛び込んみ終えた時、輪は小さくなって消えてしまった。

「な、何だったの？」

「さあ？」

■

「久しぶりに見かけたと思って、気まぐれで後を付けていたら思わぬ収穫をしてしまいました」

サニー、スター、ルナから少し離れた木の枝から、彼女は全てを見ていた。

「面白そうな記事を考えて書くのもいいですが、やはり記者としては本物の謎を追うのが一番！

ふふふ、今日の夕刊はいただきです」

風を切る羽同様、文面を作るペンもスイスイ進むだろうと心踊らせ、黒い翼は青空に行く。

第0話：幸せの青い鳥？（後書き）

いかがでしょうか。

何かありましたら遠慮なくお願いします。

第1話：神社にて（前書き）

5ヶ月にして、ようやく1話が完成。

：

すみません。

第1話：神社にて

早朝、幻想郷の人里から離れた場所にある博麗神社の賽銭箱。

その横に、肩の部分が繋がっておらず、肩と腋が見える独特なデザインの巫女服に赤いリボンをした少女、博麗霊夢は真剣な表情で立っていた。

そして意を決し、彼女は久しぶりにその蓋を開け放つ。

「ふっ。

分かってたわよ、こんな結末になるのは」

霊夢と対面したのは木の葉と虫と石ころ。

そして溶けかけた氷の中に入った蛙。

見つけ次第バカに蹴りを入れようと思った時、空からいつもの来客が降りてきた。

「よう。

何か面白い物は入ってたか？」

黒い衣装に白いエプロン、大きな黒いトンがり帽子の位置を直しながら、霧雨魔理沙は箒を片手に賽銭箱を覗く。

「あのね、これはお金を入れる為の物よ。

面白い物が入ってるわけがないわ」

「そうか？

氷漬けの蛙は明らかに面白い物だと思うが」

どこがと言い捨て、気だるげに賽銭箱の中を掃除し始める霊夢。

「で？」

わざわざ雑談しにここまで来たの？」

「雑談と言えば雑談だが、ちょっと面白い内容の雑談だぜ」

新聞を帽子から取り出し、バサリと広げた。

それを、賽銭箱に半分頭を突っ込んだ状態で覗くように見る。

「鴉天狗の新聞がどうかしたの？」

「記事を見ろよ」

そこには、『やはり実在した！幸運の青い鳥』という文字と写真。一瞬にして新聞をひったくり、食い入るように記事を読み始める。

「何これ！？」

「昨日の夕刊だ」

「違うわよ！」

何でこんな素敵な情報を早く持ってこなかったのよ！！」

「いや、私も今朝見たばかりだし……」

「言い訳無用！

こいつを捕まえるわよ」

先程までの様子から一変、やる気に満ちた表情と雰囲気を出す霊夢。

気のせいか、変なオーラが見える。

「私もそのつもりだから別にいいが、どうやって捕まえるんだ？」

「見つけ次第、殴って気絶させればいいわ。」

それに撮影した本人がいるんだから、話を聞いてみるのもいいわね」

神社の鳥居の上、そこに1人の少女が青空を背に立っていた。

「霊夢さんなら食いついてくれると思ってましたよ。
この清く正しい射命丸文、新聞記事の為…
じゃなかった。」

幻想郷の異変解決に協力しましょう」

白いシャツと黒いスカート、紅い烏帽子を被った射命丸文は、黒い翼を翻し軽やかに地面に降りた。

「本音がチラツと聞こえた気がするが、『異変解決』って言ったか？」

「ええ。」

「言いましたとも」

「これが？」

新聞を指差しながら魔理沙は眉をひそめた。

彼女は青い鳥の発見は、異変というレベルではないと思っている。

それを察したのか、文は腕を組んで大きく頷いた。

「そう疑問に思うのはごもっとも。」

数々の異変を解決してきた2人には、この程度の事は『異変』に値しないと思われても当然。

ですが、記者が一気にネタを出すとお思いで？」

不敵な笑みを浮かべ、文花帖を取り出し片手で器用にページをめくる。

「実はこの鳥、2つの大結界に引っ掛かる事無く自由に出入りして
るみたいなんです。」

しかも強引な結界破壊などでなく、高度で正式な移動術式を使用し

てると推測できます」

霊夢と魔理沙は一瞬、文の言葉が理解できなかった。

幻想郷を覆う2つの大結界は、外と中の世界を完全に隔てるもの。
『幻と実体の境界』と、『博麗大結界』がそれに当たり、2つを破るのには容易ではない。

正式な移動術式を知っていれば労力は減らせるが、使うには莫大な量の魔力なり霊力が必要になるので、破るのと変わらない結果になってしまう。

「結界の点検帰りの八雲藍さんに偶然お豆腐屋さんで会いましてね。取材しましたら結界に異常無しとの事なので、この推測の信憑性は
大と踏んでるんです。

さて、まだ『異変』と呼ぶレベルの事態ではないと言えますか？」

霊夢と魔理沙は互いの顔を見合わせ、再び新聞を見つめた。

第1話：神社にて（後書き）

どうでしょうか？

何かしらありましたら遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6702i/>

東方魔戦記

2010年10月9日10時53分発行